

井上先生との三〇年

高 埜 利 彦

学習院大学史学科に三〇年勤務した私にとって、井上先生の近くでこの間一緒の時間を過ごさせていただけただけに感謝しています。井上先生は一九七三年四月に史学科に着任されていましたが、先生の三八年間の史学科時代の三〇年のお付き合いということになります。一九八〇年に私は非常勤講師を担当いたしました。その年の講師歓迎会に招かれ、目白の揚子江で初めて井上先生とお話しさせていただきました。当時、史料編纂所に勤務していた私が、長州の『周布政之助傳』を東京大学出版会から出版して間もない頃でしたから、三十代後半の先生から関連したお話を伺いました。その時に先生が長州出身であり、古代史の井上光貞先生（井上馨と桂太郎の孫）と長州話を大学時代にされた話などを伺いました。それ以前に先生にお目に掛る機会はありませんでしたが、後輩である私は、井上先生の修士論文が手書き原稿用紙で余りに膨大でリヤカーで運んだ（？）という逸話を聞いたことがありました。

史学科での三〇年間の井上先生について、二つのことを書き記しておきます。

多くの人は、眠る時間を差し引いた活動時間の大部分を職場で過ごします。だから職場である史学科で過ごす時間を、私も大切にしたいと考えます。職場で過ごすことに充実感を見出せないならば、人生そのものが不満足になるといっても過言ではないでしょう。史学科の先生方や助教・副手も学生・院生たちも実に気持ちの良い人たちで、私にはとても満足のいくものなのですが、しかしよく観察とこの三〇年間、先生方は多くの配慮をされながら過ごしやすい環境を作ってきたのです。まことに大人の集団でした。一般的に、組織の中に自己主張を強くする人が複数いれば、ぶつかり合うまいかないことになりませんが、お互いに譲り合って妥協点を見出そうと配慮するならば、組織の運営はうまくいくものでしょう。児玉幸多先生は、これを和の心と呼んで尊んでいたそうですから、史学科の長い伝統と言えるかもしれません。

これに加えて、議論のカスガイになるような存在が、バランスのとれた意見を述べることで、より調和を保つことができます。井上先生は、このカスガイのような存在でした。史学科に着任して五年

目には、私は、井上先生の存在の魅力を、あとで述べる学問のことと合わせて感じ取っていました。六年目に、先輩の先生方の都合がつかず、幸運にも在外研究の機会が私に与えられました。一年間、フランスで研修をさせていただいた頃のこと、私に、縁のある大学から転職して欲しいとの依頼の書簡がバりに届きました。私なりにあれこれ考えた結果、謹んでお断りしたのですが、その際の判断の決め手になったのは、史学科の井上先生の存在でした。私は、井上先生のいる史学科が十分に好きになっていたので。

この、史学科にとっての先生の存在の意味をしっかりと説明しないと、私の心境は理解されないと思います。たとえば学生指導について、かつて黛弘道先生もそうでしたが、井上先生のゼミには数多くの学生が集まり、指導をして下さいましたが、他の学部や学科ではゼミ生の人数制限を行い、一学年一〇人止まりとか一五人までに制限するところがあります。井上先生は、常にそれを越える多人数の学生を抱えて指導に当たり、卒業生を輩出してきました。この間ただの一度も、多人数学生を指導する負担の重さを先生が口に出されるのを、私は聞いたことがありません。これはほんの一例です。

次に井上先生の研究について書き記します。

井上先生が対談の名手であることは、中村真一郎との対談「幕末官僚の教養と役割」（中村真一郎対話集『王朝とアジア』一九八五年・国書刊行会）で如実に示されており、知ることができのですが、私にはもっと直接的に、井上先生と坂本多加雄さん（故人）と私の鼎談を、学習院史学会が企画した折に感じ入りました。対談や座談は、相手の話に直ちに反応する機転の良さと、これに添えてさ

らに話を展開させる能力が求められます。私はこの力が乏しく、井上先生のリードで何とか役目を務められた記憶が今も残っています。

井上先生は幕末・明治維新・文明開化期を研究対象に著書・論文で発表されていますから、多くの人が知るところですが、その前後の江戸時代や明治・大正・昭和にいたる幅広い学識をお持ちであることを、卒論・修論の口述試験の場などで、身近に感じ入りました。先生が明治維新时期を研究対象に選ばれたことと、私が江戸時代の研究を行ってきたことは、単に時代の違いどころか、研究の方法や目指す点などで大きく異なることと考えています。学生の頃私には、明治維新时期の研究は無理だなど早々に思いました。それこそ一生かけても到達しないほどの、膨大な研究蓄積がすでにあるように感じられ、不勉強な自分には困難であるなど見極めました。明治初年の

「復古日記」編纂や明治末年から始まる「大日本維新史料」編纂など、国家の修史事業の蓄積があり、戦前の「日本資本主義発達史講座」や戦後の遠山茂樹さん等の数多くの研究蓄積の前に、私は尻尾を巻いて逃げたのです。

井上先生は果敢に挑まれ、膨大な先行研究と向き合い、編纂蓄積の厚い史料集の中から、先生の独自の研究成果を幅広い視野から生み出されました。江戸時代研究の私は、江戸時代研究の当時全盛であった幕藩体制論から次第に離れ、従来の江戸時代像に乏しかった修験道・陰陽道・神道等の宗教史や天皇・朝廷研究に向かいました。荒野を開拓して耕地にするように、従来未使用の史料から江戸時代史像を描くような作業に進みました。これに対して井上先生は、すでにある田畑の上に、ご自分にしかできない美味しい作物を稔らせ

るかのように、該博な知識をもとにいわば文人として、ご自分にか描けない歴史像を描き上げていく作業をなさったように思われます。

井上先生とは『日本の時代史』（吉川弘文館）の企画編集をご一緒させて頂きましたが、シリーズの企画・編集を通して、先生の歴史像を広く社会に訴える機会となりました。これからも、個人の著作のみならず企画編集の形でも振るって先生の歴史像を社会に伝えていただけるものと、先生のご健勝とともに祈りあげるものです。

ありがとうございます。